

伝承

えきびょう 疫病退治のために ちゅうぞう 铸造された ごほんぞん 御本尊 江戸期の古文書が伝える じほう ゆらい 寺宝の由来

当山の御本尊の由来が「新編武蔵風土記稿」(文化・文政期=江戸時代〔1804年～1829年〕に編まれた地誌)に残されています。以下はその要旨です。

右写真:「三国伝来 阿弥陀如来略縁起」と題した古文書を収録した『萬福寺誌』平成17年発行

不空三蔵という僧が南インドを修行中、国中に悪病がはやり、大勢の死者が出て困り果てた帝から「どうしたら、この悪病から免れることができるか」と問いかねられます。三蔵は「お釈迦様のいらしたところ、お釈迦様のご神力で仏像を鑄造して祈念したところ、たちどころに悪病が平癒したと伝え聞きます。この故事にならってすぐに仏像を鑄造して信心すべし」と答えました。そこで帝はさっそく金銅を集め溶かしたところ、阿弥陀、観音、勢至のお姿が自然と現れ、これが三尊仏像になったそうです。三尊仏像の放つ光明は国中の病苦を払い、万民は安心を得られたといいます。

その後、不空三蔵は三尊仏像を中国に持ち帰り、多くの御利益を施し、何年もの歳月が経って天平勝宝三年(751年)に日本に伝来し、平家の祖・国香(常陸の国の長)の手に渡り、伝承した末裔の梶原平三景時がこれを御本尊として萬福寺を建立したとあります。

以来、毎年12月に御本尊を洗い清めるお身ぬぐいを行い、使った霊水や浄巾が病を防ぐものとして配られました。あるときお身ぬぐいの行事を怠ったところ、翌年疫病がはやり多くの村民が亡くなりました。これはお身ぬぐいの行事を怠ったためとして、住職・檀信徒がこぞってお身ぬぐいを行い、霊水・浄巾を与えたところ、たちまち治ったといえます。



御本尊「阿弥陀如来三尊仏」。中央が阿弥陀如来様、右が観世音菩薩様、左が勢至菩薩様

●御本尊は正月3が日に御開帳されます。

医学や科学が未発達の前は、檀信徒はじめ地域の皆様は、すぎる思いで悪病の一日も早い平癒を御本尊にお祈りしたことでしょう。医学が進歩した現在、ウイルスの感染拡大を極力抑えるため、私たちにできる予防を徹底し、檀信徒ともに助け合いながら、この困難を乗り越えていきましょう。